

滋賀の茶の湯

講師名 高橋勇太

@yuta_tea.master

2021年2月14日

高橋勇太

1984年金沢生。22歳から遠州流茶道に入門。25歳で母校の茶会企画を立案し、以後石川県、富山県、都内にて茶道を軸にしたイベントに関わる。

大学では史学科に在籍し、日本中世史を専攻。卒業論文は「浅井久政の権力構造について」。卒論で近江浅井氏を研究して以来滋賀の魅力に憑りつかれ、20歳の頃からほぼ毎年滋賀を訪れる。

茶の湯の歴史を駆け足で

- 815年、文献上日本において「茶」の記述。近江国梵釈寺(大津市)にて嵯峨天皇に茶を献じられる(『日本後紀』)
- 鎌倉初期、宋から帰国した栄西が茶園を作り、日本初の茶に関する著作『喫茶養生記』を記す。
- 室町初期、武士や貴族の間で闘茶が流行する。
- 応仁の乱後、村田珠光(しゅこう)によって侘茶が誕生する。
- 織田信長が堺衆(今井宗久、津田宗及、千利休)を茶頭として召し抱える。
- 本能寺の変後、羽柴秀吉は茶の湯に傾倒し千利休をことのほか重用。秀吉家臣団で茶の湯ブームが起こる。利休は2畳の茶室「待庵」を創造するなど侘茶を大成、利休は天下一の宗匠となるが秀吉の命により切腹。
- 利休の死後、弟子である古田織部が天下一宗匠となり徳川秀忠の茶の湯指南役に。その後は織部の弟子である小堀遠州が3代将軍徳川家光の茶の湯指南役になり、遠州の後4代将軍家綱の茶の湯指南役となったのが片桐石州で、以後全国の大名家のオフィシャル流儀は石州流となる。
- 利休死後100年となる元禄年間頃から世情が安定し、裕福な町人衆へも茶の湯が浸透する。
- 利休のひ孫3兄弟がそれぞれ「表千家」「裏千家」「武者小路千家」の祖となり、いわゆる「千家十職」などの職方も形成され、現代につながる茶の湯が形作られていく。
- 江戸後期、幕末では松江藩の松平不昧、彦根藩の井伊直弼など独自の哲学で一家を成す大名茶人も出現した。

- 明治維新以降、武士階級の没落と急激な西洋化から茶の湯は苦しい時期を迎える。
- 明治後期～昭和初期にかけて新興財閥など財界人が自国に目を向ける機運が高まり彼らは茶の湯に没頭、戦後の学校教育での茶道普及、女性の茶道進出も相まり茶の湯はかつてないほど茶道人口の拡大を戦後、平成にかけて達成した

茶の歴史と滋賀

茶の先進地域は畿内である関係から滋賀は茶道史の重要人物を多く輩出。

京極(佐々木)道誉(甲良町、米原市) 1296年～1373年

辻与次郎(栗東市) 生没年不明

小堀遠州(長浜市) 1579年～1647年

片桐石州(父が長浜市) 1605年～1673年

土田友湖(近江八幡市) 黒田正玄

(大津市)

井伊直弼(彦根市) 1815年～1860年

茶道具に観る滋賀の名所

- 竹生島釜伊勢芦屋製(竹生島長浜市)
- 竹一重切花入銘園城寺(三井寺大津市)
- 芦屋霰釜 銘 園城寺
- 膳所耳付茶入銘大江(瀬田の大江大津市)
- 唐物肩衝茶入銘堅田(堅田大津市)
- 御所丸黒刷毛茶碗銘堅田(堅田の落雁大津市)